

## 講義録

### 神戸女学院大学女性学インスティテュート第1回映画会報告 坂上香監督作品『トークバック―沈黙を破る女性たち』

南 出 和 余

**“The 1st Film Screening Symposium at Kobe College Women’s Studies Institute:  
The Film” “Talk Back Out Loud” “by Dir. Kaori Sakagami”**

MINAMIDE Kazuyo

神戸女学院大学女性学インスティテュート第1回映画会報告

『トークバック―沈黙を破る女性たち』

映画：『トークバック―沈黙を破る女性たち』（坂上香監督／2013年制作）

日時：2022年11月26日（土）13：20～16：40

場所：西宮市大学交流センター大講義室

後援：西宮市・宝塚市

参加者：学外32名＋学内20名（主催関係者を含む）

本映画会は、ドキュメンタリー映像を題材にジェンダー（女性学）に関する議論を展開することで、本学在 student と地域の人々に対してジェンダー問題への気づきを促すことを目的として、2022年度から開始した。第1回目は2022年11月26日（土）午後に西宮市大学交流センターを会場に、日本のドキュメンタリー映像作家である坂上香監督による映画『トークバック―沈黙を破る女性たち』について、同映画の上映および坂上監督による講演（以下「上映会」）を開催した。開催にあたっては、女性学インスティテュートが主催となり、同インスティテュートの助成を受けた共同研究会「ドキュメンタリー映像によるジェンダー教育の可能性」（代表：南出和余）が共催を担った。

同映画は、アメリカ・サンフランシスコを舞台に、元受刑者と HIV/AIDS 陽性者の女性たちの劇団「メディア・プロジェクト」の活動に参加し、女性たちの人生や思いを捉えたドキュメンタリーである。映画が捉える女性を取り巻く社会的差別の状況や彼女たちの苦しみ、活動を通して築かれる連帯から学ぶことは多く、また監督トークによって映画制作の背景についても造詣を深めることができた。

## 《坂上香監督トーク収録》

皆さん今日は会場にお越し頂き、ありがとうございます。私は実は大阪生まれなんです。今は東京に住んでいますが、生まれは大阪で、神戸市東灘区にも小学校高学年の時に住んでいたことがあり、関西に来ると関西弁が耳に入って変な関西弁になります。東京では東京弁をしゃべっているので変な混じった言葉でお聞き苦しいかもしれませんが、ご了承ください。

この映画をご覧になって、なかにはちょっとぶっ飛びすぎていて何が何だか分からないとお思いになった方もいるかと思いますが、そもそもなぜこの映画を撮ったのか、また作る過程がちょっとユニークだと思いますので、その作り方や見せる方法についてお話ししたいと思います。今ではそんなに珍しくなくなりましたが、ただ映画を見るだけではなく見にこられた方々と交流する、一緒に語り合うような場を意識して作ったことなどもお話しできたらなと思っています。

## 「メディア・プロジェクト」

まず、ご覧頂いた映画の舞台となったのは「メディア・プロジェクト」という劇団で、元々はサンフランシスコにある女性の短期刑務所が舞台となっていました。その刑務所には未決（起訴前で刑事施設に勾留中）の人と、起訴されていてそんなに重い犯罪ではなく、例えば薬物使用や薬物所持といった程度の犯罪を犯した人たちが短期間入っています。そこには彼女たちのストーリーを使って1から舞台を作り上げていく活動があることを知り、コンタクトをとることでこの映画がスタートしました。

映画のキャッチコピーは、「メディア・プロジェクトは芸術か、セラピーか、革命か」です。「革命」というのは別に血を流すという類のものではなく、もうちょっと柔らかい感じで「社会を変えていく活動」という意味で使っていますが、彼女たちはそういう意識を持って舞台を作り上げています。演出家であるローデッサ・ジョーンズは、映画の中でもガハハハと大胆に笑う、声のどっかいおばさんですが、映画の主人公らのように、社会の周縁に置かれた女性に

共感する背景を持った方なんですね。アフリカ系アメリカ人で、パフォーマーかつ演出家で、10代で出産、いわゆるティーンマザーと呼ばれる一人でした。未婚のまま子どもを産み、シングル・マザーとして子どもを育ててきました。生活していくためにストリップや、数々の大変な仕事をしてきた人です。

## 周縁に置かれた女性に光を当てる映像を

そもそもなぜ私がこういうことに関心を持ったかということ、1990年代から2001年にかけて10年ぐらいテレビの番組を作っていたことと関係があります。番組制作会社でドキュメンタリーのディレクターだったのですが、「深刻な傷を負った人がどうやって生き直していけるのか、ただ生きていくだけではなくて、どうすればさらにより良く生きていくことができるだろう」ということに関心を持っていました。その手法を探して気がつけば30年くらい経っているのですが、関心事は30年くらいずっと変わってなくて、この映画もその1つになります。

さらにその背景には、私自身が中学生の時に集団リンチに遭った経験があります。リンチに遭ったことも傷になりましたけど、それよりも誰にも助けってもらえなかった、見殺しにされた感の方が自分の人生においては傷が大きかったということに何年かして気づいてくるんですね。そういう自分の体験もあって、周縁に置かれて声が出せない女性、自分自身もそういう話ができなかったですし、沈黙を無意識のうちに社会から強要された女性たちに関心を持ったのだと思います。彼女たちがどうやって生き直していくのかという、それを映像化したいという思いがずっとありました。

1990年代にアメリカで犯罪を犯した人たちのドキュメンタリーを作ったこともあったので、この作品が初めてではなかったんですが、女性に特化した作品を作りたいとずっとどこかで思っていました。私自身も女性ですし、テレビ業界も本当に女性って大変なんですよ、いろんな意味で！私が番組を作っていた1990年代は女性はまだまだ現場では少数者。今では女性の制作者も結構出てきていますが、技術分野では未だ女性は少なく、女性にはこういう仕事はでき

ないと予め思い込まれている。例えば秘境に行くとか、そういうドキュメンタリー企画では最初から女性は外されているとか、末端の事務の仕事しかさせてもらえない。現場は3Kと呼ばれるような非常にしんどい現場で、お給料も安いですし、24時間まるで奴隷状態。気が利かないというのはモノを投げつけられるし、男性のディレクターには本当に気分屋さんが多いので、彼らに気持ちよく仕事をさせられないと全部女性のADのせいにされるし、本当にたまったもんじゃなかったですね。そういう中で生き延びていくこと自体が大変で、やっぱり女性についてちゃんと映像を作りたいという思い、しかも社会の周縁にいる女性に光を当てたいとずっと思っていました。

2001年に従軍慰安婦に関するNHKのETVの番組に関わったんですが、政治的介入を受けて、めっちゃめちゃにされてしまったという経験をしました。自分たちが一生懸命作ろうと丁寧に取り組んできたのが一夜にして他者の手によって、権力者の手によってぐちゃぐちゃにされて、全く反対の意図にされてしまった。ああテレビはもう無理だ、テレビの業界で女性について、社会の末端の女性について、しかも性暴力の被害などについて撮るのは無理だと思いました。介入されて自分たちの作品がめちゃくちゃにされる場に至っても、制作現場は皆沈黙したんです。介入に対しては箝口令が敷かれるので、本当に誰一人として抵抗する人がいなくて、こんな業界やってらんない！と思って出ちゃったんです。

## 「メディア・プロジェクト」への参加から映画化への道のり

テレビ業界を出たんだから、よしこれからは自由に映像が作れるぞ、と思って、この前にもう1作『ライフアーズ』という作品を作りました。そちらは男性の犯罪を犯した加害者の話でした。そして次は女性、と思っていろいろ調べていくと、刑務所内で演劇とかアートを通して自分が変容していくという活動がいっぱいあることを知って、少しずついろんなところへ足を運びました。映画祭で出かけたついでにリサーチして、近くで何かあれば演劇を見ろとか、刑務所の中で演劇をやってるのを見つければ、そこの団体にコンタクトをとって

見せてもらうということを何年かやっていったんです。その中で、本当は撮りたかったけれども断られて撮れなかったところがオーストラリアにあったんですが、撮らせてくれそうなのが、このローデッサ・ジョーンズたちがやっていたアメリカのメディア・プロジェクトだったんです。

繋がって見たらすぐに撮らせてはくれたんですが、それはあくまでも彼女たちの活動の記録としてのボランティアに過ぎず、何年かは下働きをさせられて、ビデオも全部取り上げられたりしました。私買ったビデオテープなんだけど…って言っても、「あなたはこのプロジェクトの一部なんだから」みたいに言われて、それを映画化する許可をもらう関係を築くのに4～5年ぐらいかかりました。ようやく映画のゴーサインが出て、さらに関係を築いて、2010年に公開された演劇を撮ってそれを軸に作品を作っていくことにしました。演劇を作って演じることによって、彼女たちは人生に意味を見出し、それを変換させることができる。起こったことは変えられないけれど、その意味や物語の展開はいくらでも変えていくことができるというのが、彼女たちが演劇を通してやっていることだと思うんですが、それを8年かけて取材していきました。

最初は2006年4月か5月でしたかね、ローデッサ・ジョーンズにコンタクトをとって、彼女たちが関わっていた労働区域を見に行ったんです。その後、アーティスト・イン・レジデンスというのがあるからその制度を使えば刑務所に入れてもらえるよと言われ、そこでプロジェクトのメンバーとして2ヶ月住み込んで、週4回刑務所に通って記録係をしました。学校の先生や公務員、アルバイトのフリーターやダンサーの卵、本当にいろんな人たちがボランティアとして関わっていました。午後3時くらいから刑務所に入り、まずボディチェックとかいろんなチェックがあるので、女性の受刑者たちと会えるまでに1時間ぐらいかかるんです。だから4時くらいから練習を始めて7時か8時くらいまでやっているのを撮って帰るという感じです。これがすごくおかしくて、私は記録のために入っていたんですが、ヨガの先生やダンサーのボランティアからは、「香、何やってんの！ほらほら、入って、入って！」みたいに言われて、「え、私もやるんですか」とか言って、「あんた体硬いわね」みたい

な感じでした。皆の中で記録するだけではなく、いわゆる社会科学という参与観察という、自分たちも関わりつつ撮っていくということを2ヶ月間やらせてもらいました。すごく勉強になったし、女性受刑者の人たちに対しても1日3時間とか4時間の限られた時間ですが、今まで私が持っていたイメージが崩されるというか、一人一人の顔が見えてきたという経験をしました。

これで作品を作るぞと思っていたら、メディア・プロジェクトが刑務所から出ていってしまったんです。今でこそアメリカの刑務所はアートにすごく力を入れていて、演劇部やアート系の活動があって、ダンスや歌やコーラスなど、いろんな表現のプログラムがあるんですが、当時はまだ少なくて、メディア・プロジェクトはその先駆けだったんです。いろんなプログラムがタケノコのように出始めた時期でもあり、刑務所側が強圧的になっていた。いろんなプログラムが入ってきては、さらっとダンスして終わりみたいな感じでした。メディア・プロジェクトはかなり突っ込んで議論するんですよね、政治的な話もするし、看守もいるのに目の前で刑務所批判もガンガンやる。看守はそういうのを聞いているとあまり面白くないですよね、それで嫌がらせをされることも実際にありました。そういう姿勢を見てすごく面白いと思ってたんですが、活動が非常にやりづらくなっていきました。メディア・プロジェクトのラディカルさとか、過激な、何でもありみたいな世界が縮こまった感じになって、これもやっちゃダメあれもやっちゃダメみたいになってきて、ローデッサたちが、これじゃあメディア・プロジェクトの意味がないって感じるようになってきて、もう出よう、外で活動しようということで、撤退しちゃったんです。

私はアメリカに住んでいるわけではなく、当時は大学教員を常勤でやっていたのでアメリカに行ける時って夏休みか冬休みしかないんですよ。試験監督とかやりながら、なんで私はここで試験監督してるんだ、今サンフランシスコにいて記録したいのに、みたいな気持ちがありました。向こうで起こっていることが私には伝わってこなくなって、ようやく行ってみたらもう完全に撤退して出ていってしまったと言われて、ええ、つてなりました。すでに国内で寄付も募ってたんですよね、女性刑務所の映画を撮ります、みたいなことで。刑務所

出ちゃったら刑務所の女性の映画じゃないじゃん！みたいになって、すごく悩みました。時間が経つにつれて、メディア・プロジェクトのメンバーたちが女性の HIV 患者たちとプロジェクトを組んでやっていくことや、HIV 患者の中にも元受刑者が何人かいることが分かりました。それで私の方が気持ちを切り替えてやっていくことにしました。結果的に、刑務所の中での活動は映画にちょろっと出ているだけで、どちらかというと HIV に罹患した女性たちの話になっています。

## 「ワーク・イン・プログレス」という手法

映画を作るにあたっては、テレビと違って予算がゼロなので、自分たちで工面しなくちゃいけないんですね。『ライフアーズ』という映画も真っ赤かでした。自分たちのポケットマネーで作っているのが本当に『トークバック』の撮影は大変。海外で、しかも撮影クルーを日本から連れていくので、1回の撮影で数週間滞在すると何百万というお金がかかってしまう。それでクラウド・ファンディングというのを使って初めてやりました。ネットで寄付を募る中で「市民プロデューサー制度」というのを作りました。ただお金をください、っていうのはお金を出す方としても、あまり面白くないだろうなあと思って、たくさん出してもらうには出してくれた人が満足する、参加してるんだっていう感覚を持ってもらうために、一定の金額を出してくれた方は編集段階から関わってもらうことにしたんです。「ワーク・イン・プログレス」というんですが、海外では昔からあって、私自身もニューヨークで友だちがやっているのを見て目から鱗でした。

というのも日本のテレビ業界では撮った作品を事前に見せてはいけない約束があるんですよね。私もそれが自明になっていたもので、途中で見せるの??みたいな。私にとっては試写というのは権力を持ったプロデューサーが、これはダメだ、あれはダメだ、って言う場としてのネガティブなイメージしかなかったんですね。なので、編集段階を見せて一緒にクリエーションしていったら、ポジティブに何かを作り上げるっていうことを感覚として経験したことがなかっ



たので、私にとったらすごい挑戦だったんですが、初めてそのワーク・イン・プログレスをやりました。しかも10回以上。

面白かったのが、ダルク女性ハウスという薬物依存症の女性たちとのワーク・イン・プログレスで、まだ完成作品の1.5倍、3時間ぐらいいある映像を1時間ずつぐらいい区切って上映するんですが、女性たちは皆寝っ転がってるんですね。ダルク女性ハウスでやったので、スクリーンなんてないので小さいホワイトボードにプロジェクターで映し出して、1時間経ったら皆サササってベランダに出てタバコを吸って、戻ってきてお茶を飲みながらおしゃべりする。それがすごいんですよ、皆映画について語るんじゃなくて自分を語り出すんですよ。「そういえば自分もLAで」「あんたロサンゼルスにいたの」みたいな話が出てきたり、自分の娘や子どもとの関係を話し出したり。毎回休み時間をとる度にものすごい世界が広がった感覚があって、今でもよく覚えている、私にとってすごく大きな経験でした。

アメリカでも当事者の人たちにワーク・イン・プログレスをして観せたりしました。ほぼ完成直前だったんですが、キルティングワークショップをしたこともあります。「皆でバナーを作ろう、上映するときにそれを掲げたりするといいんじゃないか」という案が出て、ダルクの人や、性暴力の被害に遭ったり、薬物依存の問題があったり、この映画に出ている人たちとあまり変わらない状況にある人たちと一緒にワークショップをして、5センチ四方の四角い布にそれぞれのストーリーを縫い付けて、それができた人から発表していくことをやりました。それ自体がヒーリングでエンパワリングな経験でした。2014年に公開されて、自主上映などに回っていく時に大体私はこれを持って回っていました。

映画の中にはさまざまなワークが出てきますが、試写会や上映会の後にもちょっと味わってもらえるような場を持ちました。詩人を介して詩のワークショップをやったり、劇場でダルクの人たちによる詩の朗読会をやったこともあります。薬物依存症の女性たちは、顔を見せるとまずいということで、客席に背中を向けて朗読したんですけど、客席と朗読者の間で一体感が生まれ、非

常に感動的でした。あと大阪の釜ヶ崎に、「でこぼこバンド」という釜ヶ崎のおっちゃんたちのバンドがあって、音のワークをしました。彼らが歌っているのは「酒ばかり飲んで女房に逃げられた」みたいな、情けない曲なんですが、それに合わせて皆で音を鳴らして音楽を奏でたりもしました。神戸でやったパフォーマンスでは、縄を使って閉じられた世界からどう自分を解放するか、みたいなパフォーマンスを皆でやりました。横浜ではあらかじめ「私たちは AIDS と共に生きている」という T シャツを作っておいて、刺繍やペインティングをして、オリジナルの T シャツを着て街歩きをしたり。海外でも薬物依存症の支援施設に行って上映会をして当事者の人たちと話し合ったりもしました。あと男性の施設で試写会をした時は、加害体験のある人たちが多くいて、自分が暴力を振るった女性のことを思い出して言葉にならなかったり、泣き出したり、何とか言葉にしようとしたりと、まあいろいろだったんですけど、すごく堪えたようでした。大学でも上映会をやってディスカッションをしたりしました。

そして、この『トークバック』で培ってきた手法を2020年公開の『プリズン・サークル』という新作でもやっています。

### 質疑応答（抜粋）

- Q. 映画を作る大変さは想像以上でした。映画はテレビよりもっと真実を語る媒体だと言えますか。
- A. 映画は劇場が何を上映してくれるか、物議を醸しだすので止めておこう、みたいなことはありますが、テレビに比べると制限は少ないですね。どこかの映画館は上映してくれる。場がもっとある。テレビは1回限りですからね。
- Q. 「芸術か、セラピーか、革命か」とありましたが、私はセラピーだと思いました。これが一種の治療であってほしいし、もっと多くの人が経験を積めるといいと思いました。日本にはメディア・プロジェクトのような取

り組みはないのでしょうか。

- A. 日本でも演劇関係の人たちがこの映画をみて触発されて活動をしたり、この映画が劇場公開されていた時にはいろんな劇団がやってきて、どうしたらいいか助言を求められたり、一緒にやったりしました。ダルク女性ハウスではコロナ前には演劇をやっていましたし、以前に比べれば日本でも機会は増えています。いろんな自助グループがエイサーなど踊りを取り入れたり、いろんな表現活動を取り入れたりしています。演劇だけに限らずいろんな表現がある。ローデッサがやっているようなヒーリングでもあります。社会に開かれた変革を目指すような取り組みはまだ少ないとは思いますが。

- Q. HIV に関するイメージや知識情報の更新が自分の中でなされていなかったことを痛感しました。

- A. 1990年代にニューヨークで HIV に感染した家族に1年張り付いて取材して番組を作ったことがあります。この映画は2006年から2012年に撮っているので、その間15年ぐらいを比べると状況は格段に変わっていて、今は HIV は共に生きていける病気になっています。HIV ウィルスが原因で死ぬことはもうほとんどなくて、その副作用や合併症で亡くなることはあっても HIV で亡くなることはなく、治療法もカクテル療法というのので格段に変化しています。物理的な面の変化はとても大きい。一方で、例えばサンフランシスコは LGBTQ の人たちも多くていろいろな活動をしている地域であるにも関わらず、15年前の状況と比べても全然偏見がなくなっていないということにびっくりしました。どうなってるんだ、とショックでした。そのことについてもっと知る必要がある、一般の人たちの関心が薄れていることが問題です。こういう演劇などを通して知ることができればと思います。

- Q. 沈黙が分断を生むということですね。

A. 日本で HIV 感染者の女性たちとワーク・イン・プロGRESSをやりたかったのですが、それはとても難しいことでした。最後の方でできたけれどとても大変で、4人を集めるのも大変でした。さらに言われたのが「こんなもん作ってどうするつもりですか、この社会の中で私たちは隠して生きてるんですよ」という言葉。彼女たちはビクビクしながら生きているんです。知られることを怖がって警戒して生きています。試写会でさえ空気が凍りつく状況で、映画を見てもらっても日本では難しい。日本にはカミングアウトできない状況があって、それは社会的制裁という名での受刑者の家族へのバッシングでもそうです。自分がそういう立場になるかもしれないという想像力に乏しい。

Q. 『ライフアーズ』でも思いましたが、受刑者や受刑経験者の方は、犯罪加害者でありながら社会構造的には被害者であるということをこの映画でも感じました。各々が生い立ちや社会的生きづらさを話されていて、全体として見たときに、黒人やスパンニッシュ系など構造的弱者、被害者という側面もあるように思いました。日本でもきっとそういう側面があるのではないかなと思います。

A. おっしゃる通りだと思います。割合はわからないけれど、日本の刑務所を見たときに、外国籍や被差別部落出身者たちが結構います。『プリズン・サークル』という映画の取材中にも、自らの出自を語れるまでに時間が相当かかる人がいました。貧困者の割合も多い。見過ごしてはいけないのは構造的な問題です。日本の法務省はそういう調査をしようとしません。日本の刑務所はとても閉鎖的で、調査もさせません。おかしいという声をもっとあげていくべきです。例えば、日本の刑務所では一律で顔を出さない決まりがあります。容疑者の段階では否応なく顔をさらされるのに、です。本人が顔を出すと決めたら出してもいいはずですが。海外では同意書をとって顔を出しています。おかしいという声を上げる、知る権利を訴えることがとても重要です。

この後、会場フロアからの質問やコメントに議論を開き、さまざまな意見が寄せられた。会場アンケートに寄せられた感想はどれも肯定的で、9割の参加者が「とてもよかった・よかった」と回答した。

上映会の盛況を受けて、坂上監督の最新作『プリズン・サークル』についてもぜひ鑑賞、議論したいという声が集まり、2023年2月6日(月)午後に本学L-28を会場に自主上映会を開催した。『トークバック』上映会参加者を含め学内外から約30名が参加し、学内各学科教員の参加も得て、家族との関係、「語る」こと、日本の刑務所におけるTC（回復共同体）プログラムの意義などについて議論が盛り上がった。

（記録：南出和余）

